

目 次

	page
編者まえがき	v
特集：日本の女子高等教育と米国・カナダ	
Evangelists for Women's Education:	
The 'Civilizing Mission' of Tsuda Umeko and Alice M. Bacon Linda L. Johnson	1
Mount Holyoke College:	
Teachers to Japan, Students from Japan..... Sally Hastings	17
Surviving Japanese Militarism:	
Canadian Educators at a Christian Girls' School Patricia G. Sippel	31
研究論文	
Suitable Ships and the Hard Work of Imperialism:	
Evaluating the Japanese Navy in the 1874 Invasion of Taiwan Robert Eskildsen	47
西周の現代的意義.....小泉 仰	61
帝国日本の「道義国家」論と「公共性」 ——和辻哲郎と尾高朝雄を中心に——.....姜 海守	75
Capital Punishment in Japan:	
Unpacking Key Actors at the Governmental Level.....Obara Mika	93
The Culture of Music and Ritual in Pre-Han Confucian Thought:	
Exalting the Power of Music in Human Life..... Barry D. Steben	105
後漢の鄧太后の学者集団による「校書」	
——『詩』生民と閼宮の「毛伝」にみる漢制——.....飯島良子	125
太平天国の武昌占領とその影響.....菊池秀明	137

Colonial Adaptations in Tropical Asia: Spanish Medicine in the Philippines in the Seventeenth and Eighteenth Centuries	Arnel E. Joven	171
Absences and Excesses in Cinematic Representations of Beijing	Yinghong Li	187
イストワールからディスクールへ ——平安期の歴史物語における語りの変容——.....	大野ロベルト	201
研究ノート		
カルヴァンの語彙 ——日本語版『カルヴァン語彙集』の編纂のために——.....	竹下和亮	223
アジア文化研究所活動報告.....		235
執筆者紹介.....		244

Table of Contents

	page
Editor's Introduction.....	v
 North America and Women's Higher Education in Japan	
Evangelists for Women's Education:	
The 'Civilizing Mission' of Tsuda Umeko and Alice M. BaconLinda L. Johnson	1
Mount Holyoke College:	
Teachers to Japan, Students from Japan..... Sally Hastings	17
Surviving Japanese Militarism:	
Canadian Educators at a Christian Girls' SchoolPatricia G. Sippel	31
 Research Articles	
Suitable Ships and the Hard Work of Imperialism:	
Evaluating the Japanese Navy in the 1874 Invasion of Taiwan Robert Eskildsen	47
The Significance of Nishi Amane, for Present-day Japan Koizumi Takashi	61
The Empire of the Morality-Righteousness in Watsuji Tetsuro and Odaka Tomoo	Kang Haesoo 75
Capital Punishment in Japan:	
Unpacking Key Actors at the Governmental Level.....Obara Mika	93
The Culture of Music and Ritual in Pre-Han Confucian Thought:	
Exalting the Power of Music in Human Life..... Barry D. Steben	105
The Palace Archives under Empress Dowager Deng in the Later Han:	
On the "Mao Annotation" to the <i>Classics of Poetry</i> Dealing with the Birth of Mankind	Iijima Yoshiko 125

An Analysis of the Taiping Army's Occupying Wuchang City, Hubei Province and its Influence in 1853	Kikuchi Hideaki	137
Colonial Adaptations in Tropical Asia: Spanish Medicine in the Philippines in the Seventeenth and Eighteenth Centuries	Arnel E. Joven	171
Absences and Excesses in Cinematic Representations of Beijing	Yinghong Li	187
From <i>Histoire</i> to <i>Discours</i> : The Transformation of Narrative in <i>Rekishi Monogatari</i> during the Heian Period.....	Ōno Robert	201
Research Note		
The Vocabulary of Calvin	Takeshita Kazuaki	223
Activities of the Institute of Asian Cultural Studies (January 2011–December 2011).....		235
List of Contributors		244

編者まえがき

国際基督教大学はアジア文化研究に大変力を注いでいる。ICUの初代学長であった湯浅八郎先生は、ICUは国家・民族・文化、そして学問分野の間にある壁を超える大学であるべきだと主張され、アジア諸国の研究者や学生との広範囲に渉る相互交流を奨励された。1958年には武田(長)清子先生の尽力によってアジア文化研究委員会が発足し、1971年に現在のアジア文化研究所へと改編された。武田先生は本研究所の所長を長年務められ、その御指導の下で本研究所は、日本を含むアジア諸国に関する研究活動を援助し、アジア社会の歴史的展開を世界史的視野のもとに理解しようと努めてきた。特に本研究所が力を注いできたのは、次の5つの活動である。すなわち、1)日本人研究者の他に、アジア諸地域やその他の国々の研究者を招き、アジア社会の文化——歴史・宗教・経済・政治等——に関する研究を行う、2)アジアに対して共通の学問的関心を持つ大学・研究機関・研究者グループと共同研究を行う、3)アジアに関する研究資料や論文等の蒐集・整理・保管、4)アジアをテーマとした研究会・講演会・セミナー等の企画・開催、5)研究成果を『アジア文化研究』(*Asian Cultural Studies*)その他によって刊行する、という事業である。

『アジア文化研究』38号は14本の論文を掲載しており、その内の4本は日本語、10本は英語論文である。本号には2011年にICUで開催された日本アジア研究会(ASCJ)のパネル「日本の女子高等教育と米国・カナダ」で発表された3本の論文が含まれている。このパネルはサリー・ヘイスティングス氏によって企画された。アーネル・E・ジョヴェン氏の論文も同年の日本アジア研究会での発表を元にしてしている。バリー・ステベン氏の論文は2010年11月にアジア文化研究所が開催したシンポジウム「東アジアにおける「礼」と「楽」」の為にまとめられたものである。本号を閲読された諸氏がアジア研究に関する論文を、これからもふるって御寄稿いただければ幸いである。本号に掲載した論文それぞれの簡単な要約を以下に記す。

特集：日本の女子高等教育と米国・カナダ

この特集の3本の論文は2011年にICUで開催された日本アジア研究会のパネルで発表されたものである。日本における女性のための高等教育機関の設立を援助した女性たちの、太平洋を超えた協力関係に焦点をあてている。これは、それぞれ異なる宣教活動・教育機関・個人に関する研究を持ち寄ることで、女性たちの国際的協力関係についてより多角的に提示しようという試みであった。

リンダ・L・ジョンソン氏の論文は、日本人女性のための教育の機会を支援する女性教育家や慈善家たちの国家を超えたネットワークを形成した津田梅子とアリス・M・ベーコンの「文明化の使命」について考察している。1900年創立の女子英学塾は、知識の習得より人格育成を重視しながらも女性の経済的自立を奨励した。

サリー・ヘイスティングス氏は、世界中の知を獲得しようとする日本人の探求に女性がど

う貢献したかを理解するため、1890年代にマウント・ホルヨーク大学に留学した4人の日本人女性の人生を掘り起こした。4人の女性たちは関西地域のミッションスクールから選ばれた。彼女らの人生は、日本人女性の高等教育の促進におけるプロテスタントの宗派のつながりの重要性を示すものである。

パトリア・G・シッペル氏の論文は、日本が戦争に向かうなかで生き残りを図ろうとするキリスト教系や外国人創立の女学校が直面した難問とそれに対して講じた対応を理解するため、東洋英和女学校における1931年から1941年の重要な出来事を分析した。とくに、東洋英和の最後の外国人校長フランシス・ハミルトンの経験に焦点を当てている。ハミルトンの同校における長い職歴は1917年のカナダからの来日に始まり、39年後の1956年に終わった。

研究論文

ロバート・エスキルドセン氏は1874年の日本の台湾出兵を取り上げた。1871年末の台湾住民による琉球人大量殺害事件に対する制裁を企図しての軍事行動である。懲罰という目的は達成したものの、台湾出兵は帝国主義を担う一翼となるには至っていないことを日本海軍は露呈した。

小泉仰氏は日本における西洋哲学研究の先駆者、西周の業績を検討し、その独創的な功利主義理解に注目した。さらに西の業績の独自性を明証するために、西の訳出した西洋の哲学用語の翻訳語を他の洋学者（福沢諭吉、加藤弘之など）とも比較検討している。

姜海守氏は戦中の帝国日本に現れた「道義国家」と「公共性」の概念について戦後を含めて考察しており、特に和辻哲郎と尾高朝雄の思想に注目している。戦前の道義国家の概念の一貫性を、戦後の政界と学界の中に見て取り、更に1945年に日本の支配から解放された後の韓国において、より広範囲に発展したことを指摘している。

小原美夏氏は、政府の政策決定場面で鍵をにぎるアクターの分析を通じて、日本における死刑制度反対運動に対する制度的制約を検討した。死刑制度は世論に則ったものという一般的認識に対し、死刑問題が主としてエリート主導であり、政治的駆け引きに劣らず個人的価値観を反映していることを主張している。

バリー・D・ステベン氏は『禮記』中の「楽紀」の章をとりあげ、儒教的実践に見られる身体・精神・霊性の統合の様相を検討した。他の精神的鍛錬や舞台芸術と同様、洗練された音楽や芸術や儀礼のリズムを介した自己の無化と超越を通してこの統合は成し遂げられる。前近代的な音楽伝統や音楽舞踊伝統の維持と復興が、分立へと向かう近現代社会に資する所があることをステベン氏は論じている。

飯島良子氏は、後漢の鄧太后時代の事業である宮廷蔵書庫（東觀閣）設立の裏にある政治的目的について詳細な研究を行っている。ここでは『詩』の「毛伝」を取り上げ、古典の再編・校閲・注釈が後漢政権の確立と存続に密接に関連していることを明らかにしている。

菊池秀明氏は、1853年の太平天国による湖北の武昌占領へ至った事象を語る。太平軍は武昌に迫る過程で多くの参加者を獲得し、清軍の防禦を圧倒することに成功した。太平軍は都市住民の富を略奪し、彼らを厳しい軍事組織へ組み入れる措置をとった。興味深いことに、それは後に南京で実行される軍事共産主義的制度のひな形となるものだった。

アーネル・E・ジョヴェン氏は、17・18世紀フィリピンにおけるスペイン人宣教師たちが、スペイン植民地帝国から比較的疎外された存在でありながら、いかにフィリピンの既存の伝統医学を学び、利用し、そして実質的にキリスト教化していったかを論じている。ジョヴェン氏はまた、土着の薬草を分類した修道士たちの広範囲におよぶ——しかし大方忘れ去られた——研究も調査している。

李迎紅氏は、ポスト社会主義中国の社会状況に目を光らせるメディア検閲が相対的に緩和されたのに乗じて中国の映画監督たちが製作した近年の作品を分析する。李氏は、新たな近代化重視の風潮から生じた現実の深い亀裂を表象するにあたり、映画製作者たちがとった様々な手法と立場に焦点を当てた。

大野口ベルト氏は、平安後期から鎌倉期にかけての歴史物語を理解するアプローチとして、「歴史」と「物語」の二つの領域を分離するよりむしろ統合するという新しい方法を提示している。大野氏は『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の三つの古典を吟味し、これらのテキストが生み出された歴史的な文脈のなかに位置づける試みを展開している。

研究ノート

竹下和亮氏はジャン・カルヴァンの神学の語彙集編纂の企画に関する研究ノートを寄稿した。竹下氏は、カルヴァンの語彙のうち幾つかの用語を地理的・時間的文脈に位置づける試みをし、それらを日本語に翻訳する際に生じる困難かつ不可避の問題群を紹介している。

本号には2011年のアジア文化研究所の簡単な活動報告も含まれている。2011年5月11日に魚住昌良教授が80歳で御逝去されたことを哀悼の意をもってご報告申し上げます。魚住教授は西洋史がご専門で、日本における都市史研究のパイオニアであり、ICUで1975年から26年間に亘って教鞭を取られた。1983年には武田(長)清子教授の後任としてアジア文化研究所の所長に就任された。12年間の在職中に研究所が開催した多くのシンポジウムは、ICUの国内外での学術的評価を著しく高めた。心からご冥福をお祈りする。

最後になったが本号の編集に際し研究助手である鄭戴勳、宮沢恵理子、岡本佳子、高崎恵、田中祐介の諸氏の尽力を得たことを記して謝意に代えたい。

2012年3月30日

M. ウィリアム・スティール

Editor's Introduction

The International Christian University is strongly committed to Asian Studies. The first president of ICU, Yuasa Hachiro, insisted that ICU should be international, interracial, inter-cultural, and co-educational. He encouraged broad exchange relationships with scholars and students in Asia. Chō Takeda Kiyoko was instrumental in setting up a Committee on Asian Studies in 1958 which in 1971 was re-organized as the Institute of Asian Cultural Studies. She served as Director of the Institute for many years. Under her direction, the Institute sought to facilitate research of Asian societies, including Japan, and to understand their historical development in world perspective. Specifically the Institute has sought to: 1) Invite scholars from various countries in Asia, and other parts of the world to conduct research on the historical, religious, economic, political, and other aspects of Asian cultures; 2) Carry out joint research projects with academic groups and institutes which share a common interest in Asia; 3) Collect, organize, and preserve research materials relating to Asia; 4) Plan and hold lectures, seminars, and symposia on Asian topics; and 5) Publish the results of research in *Asian Cultural Studies* and in other publications.

Volume 38 of *Asian Cultural Studies* includes fourteen articles, five written in Japanese and ten in English. In this volume we include three papers on “North America and Women’s Higher Education in Japan” which were presented as a panel in the 2011 Asian Studies Conference Japan held on the ICU campus. The panel was organized by Sally Hastings. The article by Arnel Joven also had its origin as a presentation to the 2011 Asian Studies Conference Japan. Barry Steben’s article was prepared for a symposium on “Rites and Music in the East Asian Tradition” sponsored by the Institute in November 2010. The Institute encourages submission of manuscripts related to Asian studies. Brief summaries of the articles follow:

North America and Japanese Higher Education for Women

This set of three papers focuses on Trans-Pacific alliances among women that helped to construct Japanese institutions of higher learning for women. By bringing together different mission movements, educational institutions, and individuals, the paper attempts to provide a more textured account of the trans-Pacific relationships among women.

Linda L. Johnson examines the “civilizing mission” of Tsuda Umeko and Alice M. Bacon in creating a transnational network of women educators and philanthropists in support of educational opportunities for Japanese women. The Joshi Eigaku Juku, established in 1900, privileged character development over knowledge acquisition, but nonetheless encouraged women’s economic independence.

Sally Hastings explores the lives of four Japanese women who attended Mount Holyoke College in the 1890s in order to understand how women contributed to the Japanese quest to seek knowledge from throughout the world. The four women were recruited from mission schools in the Kansai region. Their lives illustrate the importance of Protestant denominational ties in facilitating higher education for Japanese

women.

Patricia G. Sippel analyzes some key events at Tōyō Eiwa Jogakkō from 1931 to 1941 to understand the challenges faced and the accommodations adopted by a Christian and foreign-founded girls' school seeking survival as Japan moved towards war. It focuses on the experiences of Frances Hamilton, Tōyō Eiwa's last foreign principal, whose long career at the school began with her arrival from Canada in 1917 and ended 39 years later, in 1956.

Research Articles

Robert Eskilden examines the 1874 Japanese military expedition to Taiwan that sought to punish local villagers who had murdered several dozen people from Ryukyu in late 1871. While the punitive aims of the expedition were successful, it demonstrated that the Japanese navy was not prepared for the hard work of imperialism.

Koizumi Takashi has studied the work of Nishi Amane, an early scholar of Western philosophy in Japan. He focuses on the originality of Nishi's interpretation of utilitarianism. He also compares Nishi's translation of Western philosophical terms with those of others (including Fukuzawa Yukichi and Katō Hiroyuki) in order to demonstrate the originality of Nishi's scholarship.

Kang Haesoo is the author of an article on the postwar fate of ideologies of national morality that prevailed in wartime Japan, especially looking at the thought of Watsuji Tetsuro and Okada Tomoo. He compares the persistence of prewar national morality in both political and academic circles in postwar Japan with the more open public space that evolved in Korea after it had been liberated from Japanese rule in 1945.

Mika Obara investigates institutional constraints on attempts to oppose capital punishment in Japan through an analysis of key actors in government decision-making. She challenges the perception that capital punishment is retained in conformity with public opinion, contending that the issue is primarily elite-driven, reflecting personality as much as politics.

Barry D. Steben examines the *Yueji* (Record of Music) chapter of the *Liji* (Record of Ritual). He shows how Confucian practice, as in other spiritual disciplines and performing arts, involved the integration of body, mind and spirit through self-submission and self-transcendence as mediated by the refined rhythms of music, art, and ritual. Steben's argues that the disintegrated nature of modern society could well profit from the preservation and revival of pre-modern musical and music-dance traditions.

Iijima Yoshiko has written a detailed analysis of the political motives behind the establishment of the Palace Archives under Empress Dowager Deng in the Later Han dynasty. She focuses on the "Mao Annotation" to the Classic of Poetry, showing how the compilation, revision and retouching of classic texts could serve as avenues to the attainment and preservation of political power.

Kikuchi Hideaki narrates events leading up to the occupation of Wuchang City in Hubei Province by the Taiping in 1853. The Taiping forces swelled in size as it approached Wuchang and succeeded in overwhelming the Qing defenders. The Taiping plundered the wealth of the city, placing its population under harsh military rule. Interestingly, this can be seen as a sort of model for the communal military system en-

forced later in Nanjing.

Arnel E. Joven shows how Spanish missionaries in the Philippines in the seventeenth and eighteenth centuries, relatively isolated from the rest of Spain's colonial empire, studied, used, and in effect Christianized native medical traditions. His study also surveys the extensive (and largely forgotten) research made by friars in cataloguing indigenous medical plants.

Yinghong Li examines recent films by mainland Chinese directors who have taken advantage of a relative relaxation of media censorship to scrutinize social conditions in post-socialist China. She focuses on the different strategies and positions adopted by filmmakers in representing the deeply fractured realities that have arisen from the new emphasis on modernization.

Ōno Robert presents an alternate approach to understanding late Heian and Kamakura period "historical tales" (*rekishi monogatari*), seeking to unify rather than separate the "historical" and "narrative" aspects of the genre. He examines three classics, the *Eiga Monogatari*, *Ōkagami*, and the *Ima Kagami*, and attempts to place each within the historical context of the time in which they were produced.

Research Note

Takehita Kazuaki contributed a research note on a project to compile a dictionary of John Calvin's theological vocabulary. He attempts to place several words in Calvin's vocabulary in their geographic and temporal context, and introduces difficult but unavoidable problems encountered in translating these terms into Japanese.

A brief summary of the activities of the Institute of Asian Cultural Studies in 2011 is also included in this volume. We note with sadness the passing of Professor Uozumi Masayoshi on May 11, 2011 at the age of eighty. Professor Uozumi, a specialist on European history and pioneer in the field of urban history in Japan, taught at ICU for a total of 26 years, beginning in 1975. In 1983 he succeeded Professor Kiyoko Chō (Takeda) as Director of the Institute of Asian Cultural Studies. During his 12 years as Director, the Institute sponsored many symposia which greatly enhanced the academic reputation of ICU both in Japan and abroad. May he rest in peace.

Finally I wish to express my gratitude to the fine work of the Institute's research assistant staff, Jung Jae-Hoon, Miyazawa Eriko, Okamoto Yoshiko, Takasaki Megumi, and Tanaka Yusuke for their work in proofreading and otherwise preparing the manuscript for publication.

March 30, 2012
M. William Steele